

心の中の偏見

市島中学校 3年 荻野 聡真

5月に、新型コロナウイルスも五類へと移行して、世の中は少しずつ以前の生活を取り戻しつつあります。僕は、三年間のコロナ禍で、世の中や自分自身に対しても、複雑な気持ちになりました。最初の頃はニュースなどで、都会から帰省した人の家に石を投げたり、懸命に治療に当たっている看護師さんの子供に対して、学校に通わせないでほしいと暴言を吐く人がいると知り、信じられない、ひどいなと思いました。しかし、段々とコロナが身近になってくると、僕の心にも少しずつ変化が現れてきました。病気にかかり重症化したらどうしようという怖さよりも、学校で一番にかかってしまったら嫌だな、周りの人にどんな風に見られるのだろう、という怖さに変っていきました。

「ゴホン、ゴホン」ある時、同級生が咳をしてしんどそうにしていました。僕は、大丈夫かなと思ったけれど、もしかしたらコロナじゃないのかという心配から声をかけることができませんでした。また、昨日まで一緒に話していた友達が、突然学校を欠席した時、急にどうしたんだろう、まさかコロナにかかったのではないだろうか、自分に感染していないだろうか、とってしまうこともありました。そんな風に思ってしまう自分が嫌になり、悲しくなっていました。

そんな中、ある日突然その日はやってきました。家族の一人が、急に発熱したので。そして、コロナにかかっていないか検査を、することになりました。学校に行く準備をしていた僕に、家族は「もしかしたら、当分学校を休むことになるかもしれないよ」と言ってきました。その時、僕は家族の心配をすると同時に、自分の学校生活はどうなってしまうのだろうと不安な気持ちでいっぱいになりました。検査の結果が、出るまで数時間だったはずなのに、僕はとても長かったように感じました。そして、結果は陽性でその日から一ヶ月間、家族は外出できないようになってしまいました。家族の中には泣いている人もいました。僕も、落ち込んでしまったけれど家の中で、自分に出来る事を考え、除菌の手伝いをしたり、食事を作って運んだりしました。その内に僕も感染してしまいました。熱が出て身体はしんどいし、嗅覚は無くなってしまい、今までに無い症状で、辛く不安になりました。そんな中でも、僕が思っていたよりも周りの人の対応は、あたたかいと思うことが、沢山ありました。急に外出でき

なくなった僕達を心配して、知り合いが、ダンボール箱いっぱいの食べ物を詰めて運んでくれたり、親戚の人も「何か食べたい物ないか。」「必要な物が、あったらいつでも持って行くからね。」と電話でやさしく声をかけてくれました。

病院で診察してもらった時、嗅覚が弱まり、不安になっている僕に先生は、優しく笑いながら「さすが若いなあ回復が早いよ！」「この調子ならすぐに元に戻るから大丈夫だよ」と励ましてくれました。その一言で、僕の気持ちはとても楽になりました。

学校の先生も毎日、玄関に手紙や必要な物、僕の好きそうな本を届けてくださり、心細く感じたり孤独に思ったりすることはありませんでした。学校に行く前には少し不安になったけど、行ってみると友達は、何も変わらず接してくれてとてもうれしかったです。そして、色々考えていた自分が、少し恥ずかしくなりました。僕がコロナに対して怖いと思ったり、不安をすごく感じていたのは、自分自身のコロナに対する偏見の気持ちが、強かったからだと思います。

僕は、毎日流れていたコロナのニュースから、感染した人の色々な体験談や、辛い話を見ていて、大変な事になるのだなと分かった気になっていました。しかし、実際に自分が経験する事で、見る事や、聞く事が全てではないと感じました。そして情報を得る事も大事だけれど、自分の考えをしっかりと持ち、ふり回されてはいけないと思いました。

今は、まだコロナが完全に無くなった訳ではありません。でも、これから同じような事が起こった時には、ただ恐れるだけでなく、優しく声をかけることができる人に、なりたいたいと思いました。